

Title	昭和四十一年度史学科春季見学旅行記
Sub Title	
Author	清水, 有
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.4 (1967. 3) ,p.139(583)- 140(584)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670300-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670300-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙報

### 昭和四十一年度史学科春季見学旅行記

#### 前橋・高崎方面

六月一日、参加者の大部分は、午前八時十六分上野発の普通列車で出発した。十時三十分新前橋駅前に集合、小雨の中を貸切バスに乗込んで、見学旅行の第一歩を踏み出した。引率は松本（信広）、河北、江坂、志水、鈴木の諸先生方で、学生七十三名と合せて総勢七十九名であつた。又、群馬大学考古学研究室から尾崎、橋爪の両先生が案内の労をとつて下さつた。

さて、第一日目は前橋市方面が計画されており、最初の見学地は総社町にある総社神社であつた。本殿は慶長年間の造営であり、天正十四年銘弥勒座像の懸仏がある。ここで尾崎先生から、古代に於ける上野国についての説明をうかがつた。そして昼食をすませた後に、本殿に奉斎されている上野国神名帳を興味深く拝見させて頂いた。次はここから程遠くない所にある上野国国分寺跡であつた。国分寺は治承四年兵火にかかり、今日ではわずかに礎石の一部や古瓦を残している。ほぼ中央の土壇上に位置関係の多少乱れた十二個の礎石があつて、それが金堂跡であり、これから西南に当る所に、十五個の礎石があるのが西塔跡である。又、中門、南大門、東門跡と思われる地点にもそれぞれ礎石が散在す

る。こうした礎石の配置や地形からみて、薬師寺式伽藍配置が推定されている。傾きかかつた礎石が雨で黒々と湿つたのに出会つて、古代への郷愁というか、隔絶の感を新たにした。

次にバスを降ると道端には桑の実が黒く熟っていた。それを嗑みながら山王廃寺跡への道を辿つた。廃寺跡には、塔心礎・根巻石・礎石十八個・軒丸軒平瓦等が残存しており、四天王寺式伽藍配置であつたと想定されている。塔心礎は地下數十センチのところに上面を露出し、屋根を葺いて保存されている。又、石製鷲尾は、廃寺跡の裏手にあたる民家の庭先に安置されているのを拝見させて頂いた。

次に宝塔山古墳に向う。窓外に蚕部屋のある二階建ての民家が屢々見られる。さすがに養蚕の盛んな地方である。

宝塔山古墳は方墳であつて、玄室が前室と後室に分かれている横穴式石室は、整美な截石によつて構成される群馬県下でも代表的な末期の古墳である。そして、玄室に収められた家形石棺の脚部には格狭間が作出されており、古墳文化と仏教文化の融合を示す好例とされている。続いて蛇穴山古墳に向う。この古墳は円墳であつて、横穴式石室の玄室側面・奥壁・天井は面接の一枚石で構成され、截石による羨道・前庭部を備えている点に特色がある。懷中電燈の灯をたよりにもぐり込む。正に黄泉国への乱入であつた。

三時過ぎ、前橋市街地に入り、群馬大学考古学研究室を尋ねる。相沢忠洋さんを紹介され、尾崎先生はじめ研究室の方々の説明に

よつて、群馬県下の古墳出土品や実測図をみせて頂いた。実際の古墳を集約された形でみるのもとらえやすいものであつた。

研究室を辞して、第一日目最後の見学地、勢多郡南橋村の日輪寺に向う。日輪寺には十一面觀音立像が収蔵庫の中に安置されて

いて、ローソクの薄明りの中で寺の僧の説明をきいた。この觀音像は、素木のままのカツラ材の一木造りで、表面に丸鑿のあとがあり、垂れる天衣を欠くほかは当時のままで、体軀は比較的均齊がとれており、面相がやさしく眼も伏目になつてゐる。しかし、灯の位置、拝する位置によつて、像からうける印象は千差万別であつた。

五時過ぎ日輪寺を急ぎ辞して、宿泊地伊香保に向つた。

翌二日は九時の出発時には雨もあがつて、曇天がひろがつていた。伊香保より約一時間高崎市内へとつて返えし、先づ八幡町の觀音塚古墳へまわつた。古墳に到着すると尾崎先生が既におみえになつておらず、収蔵庫の前で説明をうかがつた。觀音塚古墳は前方後円墳で、埴輪円筒列と溝跡を伴い、前方部が後円部よりやや高い。内部構造は、後円部下に群馬県下の古墳中最大の巨石を利用した自然石乱石積の両袖型横穴式石室を備える。又、銅鏡・銅鏡・金環・須恵器その他馬具武具等を出土し、その一部が収蔵庫に収められている。このような施設が多く建られ、古墳の内容を一般の目に供するようになつてもらいたいものである。

十二時前、多野郡吉井町にある多胡碑へ向う、この途中、街道

端の休憩所で昼食をとり、帰宅者数名と別れる。

多胡碑は碑身・笠石とも凝灰質砂岩の截石で、碑文はさらへ彫りに刻まれてゐる。

弁官符上野国片岡郡綠野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

この碑文については、郡成給羊の部分の解釈、碑文の構成と官符との関係、日付が続日本紀と相異することなど疑問の余地もあり、従来、さまざまの見解が述べられて來たものである。

次に、この見学旅行最後の目的地、金井沢碑に向つた。碑石は安山岩の自然石で、山腹から山で挿まれた平地を見おろして位置

している。この碑は、奈良時代における民間への、仏教信仰の浸透度を示す好個の資料とされている。

上野国群馬郡下賛郷高田里三家子孫為七世父母現在父母現在侍家刀自他田君目頬刀自又児加那刀自孫物部君午足次馴刀自次若馴刀自合六口又知識所結人三家毛人次知万呂鍛師磯部君身麻呂合三口如是知識結而天地誓願仕奉石文

神龜三年丙寅二月廿九日

これで全日程を終えて、五時頃高崎駅前で解散した。

今回の見学旅行に際し、格別の便宜を与えられた社寺、並びに尾崎喜左雄先生、橋爪聰先生はじめ研究室の方々に、茲に心からの感謝の意を表する次第である。

(清水有記)